

速水御舟作

炎舞を書く



東京広尾
山種美術館収蔵

大正14年 軽井沢にて速水御舟の手による

Prologue 小説『燐冥』

作 飛鳥世一

目次

はじめに	1
瞬間をスッパ抜く妙技『蝶々と柘榴にみる凝着の時間』	3
速水御舟作『炎舞』を書く①	7
速水御舟作『炎舞』を書く②	9
速水御舟作『炎舞』を書く③	13
速水御舟作『炎舞』を書く④	26
速水御舟作『炎舞』を書く⑤	35
速水御舟作『炎舞』と吾小説「燐冥」	37
画家速水御舟のみた地獄	40
隨想好日『世一語録・絵画と文藝』	43
空は空 一切は空なり 速水御舟・カラヴァッジヨ編最終話	54
絵画が教えてくれた『際(きわ)』	69
速水御舟作『炎舞』令和7年・俺流解析総集編	72
あとがき	83
付録・聖書と絵画ラ・トゥール『聖ペテロの悔悟』一考察	84

はじめに

今般、本書を作る上で速水御舟作「炎舞」の収蔵元である山種美術館様より当該作品の装丁画・挿絵としての使用について温かなご理解を頂戴したことについて、まずもって御礼申し上げなければならぬ。所謂、著作権が切れている作品とはいえ、速水御舟の著名作であり三島由紀夫の金閣寺の装丁画としても使われた作品である。共に稀代の代表作だ。

そういう作品を私どものような素人が使用することに理解を示すというのは中々に、おもしろいものではないと考へても不思議はない。わたしであれば「どこのだれやねん?」となりそうなものである。

手厚きご理解とご厚情、衷心より感謝御礼申し上げます。

精々、小説『燐冥』本稿におきましてはオモシロイものであつたと感じて頂ける方たちのお声を頂けるよう尽くしてまいりたいと存じます。

なお、残念ながら小説『燐冥』本稿は未だ書き上げつておらず、筆半ばの状況。その中でこのプロローグを仕上げた目的は、これまでの変遷を確認する意味と、新たな気付きを得ること。そして一人でも多くの皆様にこの速水御舟作「炎舞」という画を知つて頂き、貴方ならこの画から何を書こうとするのか、表現してみようとするのかについて考える機会になることを目的としているからに他なりません。

どうかここまで筆者の炎舞という作品に向き合う姿勢、そして理解深度のほどお愉しみ頂きますよう前書きとしてご案内までとさせていただきます。

尚、本書はnoteの原稿から抜粋・加筆修正したものとなります。

2026年の然るべき時期までに本稿を書き上げる所存であります。何卒格別なるご支援のほど心よりお願い申し上げます。

令和七年十一月吉日

飛鳥世一 拝



速水御舟 炎舞
png

瞬間をスッパ抜く妙技『蝶々と柘榴にみる凝着の時間』

■2023年2月28日 21:37

■瞬間をスッパ抜く妙技『蝶々と柘榴にみる凝着の時間』

茨城県近代美術館・速水御舟展から

(注意) 本稿は、多分に書き手の主観が支配的原稿となつております。したがいまして、パクリなどは一切ありません。参考素材・出典は文中後半に添付

文責 飛鳥世一

なんと——本稿が、ふたつの記事まとめにフォローされました。
現代アート記事まとめ さま

美術展記事まとめ さま

有難いことです。書いて良かった。本当に。書いて良かったです。
心から感謝御礼申し上げます。

アップから七日間で1144pv-

皆様のお運び誠に有り難うござります！

大正十年仲秋
御舟作



速水御舟 鍋島の皿に柘榴
png

速水御舟 作 鍋島の皿に柘榴

さて例によりまして、この画にわたし流の解釈を加えてみましょう。みなさんは、この画をどの様にご覧になられるでしようか。

■御舟はどの様な角度からこの静物を眺め観たのだろう。一つ目のポイントです。

■なぜこの柘榴は、あんなにも鍋島の皿の奥にあるのだろうか。二つ目のポイント。

■なぜ、柘榴と鍋島の皿の接地面に影が描き込まれていないのか。三つ目のポイントです。

■なぜ、左の柘榴の先端は左を向いて倒れているのだろう、そしてなぜ、浮いているように見えるのだろう——四つ目のポイント。

これらすべてのポイントを埋めることができると「楽しい」のですねえ——幾つか考えられるでしようが、わたしは、ここで一つだけを紹介したいと思います。この四つのポイントを満たす、この画が置かれた条件です。

この柘榴——転がる寸前なのです。転がる瞬間なのです。

誰かの手によって、鍋島のお皿の上にポンと落とされたかもしれません。

その一瞬、柘榴は動きを止めたかもしれません、奥の傾斜から手前に向けて転がる寸前「一瞬の時間」を切り取るために、鍋島の「空間」「余白」が必要だったのです。

この画は、1921年、大正10年の画ですから、カメラが次第に高性能化し始めた時期（マグネシュームを発光させたフラッシュなど）にも重なります。カメラ・写真的持つリアリティーを、絵画の写実化を通して「実験」してみた作品とみると、「一瞬」を切り取ったこの画の意味はとても大きく思えてくるのです。

昨日の原稿に「瞬間的効果」と「突出効果」について書かせて頂きましたが、オモシロいでしょ？



わたしには、飛び交う蝶の一瞬と、転がり落ちようとする柘榴の一瞬に、作者の強い執着、同質の凝着時間を見ずにはおれないのです。
画って、本当にオモシロいですよね。

描き手の哲学が覗えますよね(笑)

世一

今更書くまでも無いが、良いにつけ悪いにつけ強い思い込みが支配的だ。ただ御舟はその技法(写実性)への傾倒から随分『謂われていた』という。

写真というものが発展を見た時代。一瞬を切り取ることが容易となつた時代において、絵画の持つ可能性をつき詰めようとした姿と観ることも出来るのか。

「時を止めたい」「時を切り出したい」そう考へることは不自然ではないだろう。

〔凝着と〕めた時空をもう一度流す――

さて、これは絵画での表現としては容易ではあるまい
詩と小説なら腕さえあれば出来るのである
問題は「腕」なのだ。

速水御舟作『炎舞』を書く①

■ 2023年3月15日 11:06
■ 速水御舟作『炎舞』を書く①

赤を黒とよぶ世界があることをご存じだろうか。

速水御舟は本作『炎舞』に使われた黒色について「朱色」を混ぜたと語ったそうだ。曰く「一度と出せない色である」と語ったようである。(※ここで言う「黒色」とは本書筆者の言葉・感覚であり、何某かの学術的裏付けによるものではないことを書き記しておく)

『燐冥（ようめい）』

わたしが次に書く作品のタイトルが決まった。触媒となる画は速水御舟作『炎舞』である。タイトルが決まったということは、書こうとする世界も決まったわけだ。夢殿、秋涙、凍裂に比肩する作品となる予感が強い。今の時点でわかることは夢殿が辿った道を踏襲するだろうということぐらいか。

第一形態からのトランスフォームとなる気配が濃厚だ。どうせ一発では書ききれない。悲しいことにそんな筆力はない。ただし感性と洞察だけは立っている。始末が悪い。

画像

速水御舟作 炎舞 大正14年頃の作品

随分前に、インターネットで眺めたことしかなく、实物はまだ観ることが出来ていない。大正14年ごろの作品——、泉下の人となる10年前の作品だ。山種に収蔵されているようなので観ておかなければならぬ。——

闇に凝着をみせる業炎と蛾。

紡がれた瞬きに込められたドラマは何処からきて何処へと向かうのか。

その羽を焦がすと知つてなおも狂つたように舞い踊る蛾。

さて、お運びのご仁達。

ともに旅をしてみようではないか。縦長の画枠の外への旅を——

何が見えるだろうキャンバスの外に。

何人たりともさわるべからず。

わたしにしか書けない——。

了

この時点においては未だ「炎舞」を自分の眼では鑑ていないのである。

御舟の様々な作品に触れた中で偶然目にした一枚の画に過ぎなかつたのだが、一目見た瞬間に心つかまつてしまつたのだ。

恥ずかしながら、この時は三島由紀夫が金閣寺の裝丁画として使用していたことは知らず、後に知ることとなる。

ここより具体的に炎舞に対する学びが始まる。

速水御舟作『炎舞』を書く②

■2023年3月20日 19:40

■速水御舟作『炎舞』を書く ②

さて、速水御舟の勉強がはじまった。

まずは、わたしがどうしても気になつてゐるところから始めてみたのだが
先日書いた原稿を裏付けるような応えが導き出されたことをどう表現すればよいのだろうか。やはりこの
の画家も一筋縄でゆく画家ではない。

突き詰めるのだ。

自分の持つ世界を徹底的に突き詰める。

例えはわたしが感じた、『炎舞』にみられる表現手法の異和感も当たり前のである。表現の「方針」は
一本調子ではない。複数の試みが綾なされているのだ。徹底的な写実と研ぎ澄まされた印象。勉強は、
今のところ『裏付け』という処で歓迎してくれたようだ。

昨日今日で資料が二冊届いていたが、さすがに新品は無い。三冊手に入れたものの、すべて古本の部
類である。アサヒグラフは38年前の本。アーティストジャパンは15年前のもの。もう一冊はまだ届いて
いない。

惜しむらくは、学術系に寄つた本が欲しかつたのだが、学研さんから上下巻、一冊6000円で出で
いたが、チョイと高い。シロウトの勉強にしては値が嵩張るのである。

IMG_20230320_184657_120.jpg



さて、この数日。この画を眺めていてどうしても理解できないことにぶち当たったので書いておきたい。速水御舟あなたは何故、すべての蛾が羽を開いた姿に拘ったのか、なぜ、横を向いた姿や向かってく姿を描かなかったのか。あなたの精神が凝着をみせたのは、蛾の何に対してものか。

思へば蛾は羽を休めるときには羽を開いたままに休む。蝶は羽を立てて休む。蝶は横移動縦移動自在に操る。蛾は規則的な横移動はしない。むしろ縦移動の方が得意であり滑空を好む。腹を見せた蛾と、背中を見せた蛾——御舟の描いた蛾は共に羽を開いたものであり、裏表を見るにとどめている。裏表……

写実と印象の使い分けも興味深い。

ここを消化しなければ『触媒』にはしようが無く、画家の精神世界を覗き見なければ、わたしが考えるオモシロい小説などは書きようのないことは明白なのだ。



速水御舟 炎舞
png

速水御舟 炎舞 大正14年ごろ 山種美術館収蔵

一定のところに到達した時点で、まずは詩にしてみるのも一つの手か。

了

資料を手元にしワクワクしている感じが伝わるのだが、どうにも感性ばかりが先走りをし、自分で自分の気持ちを抑えられない様子が覗える。

ただ、一つ書いておくと……わたしにとつての史料価値とは、自分の感性の裏付け的意味合いも小さくはない。これも一つの独善のようなのだろうとは考えるが、様式美を語る上においての独善は愚かにも読めるのだが、感性から派生した印象であり美は、何人よりも不可侵であるべきと考えるのである。とは言いつつも、様式美についても踏み込んでしまっていることは否めない事実でもある。

速水御舟作『炎舞』を書く③

■2023年3月24日 11:40

■速水御舟作『炎舞』を書く ③

自慢話を書くつもりは無く、自惚れ話を書くつもりもないのだが――。

速水御舟の手による様々な作品を眺めてわたしが感じたことの一つとして、北方ルネサンスの巨匠である、アルブレヒト・デュラーハの作品との近似性と相似性、そして凝着姿勢をあげていることは、2/27の原稿（Link 絵画は楽しく美しい――）を読んでもらえば分かるのだが、それはどうやら当然のことだったようだ。つい先日までは、観念的であり感覚的に感じていたことが、事実として速水御舟がデュラーハに傾斜を見ていたことがわかった。自分の持つ感覚の裏付けを取ることが出来たことの意味は小さくはない。

参考書籍『アーティストジャパン39号 速水御舟 2007年10月23日』

速水御舟の空間支配能力の高さについては、今更書くまでも無いのだが、同じことがデュラーハにも云える。

例えば、わたしが速水御舟の柘榴や花の画を観たときにイメージした」とはデュラーレの「野うさぎ」に通じるものだった。写実とリアリズムを生かすも殺すも空間を何処まで支配できるか。

一つ云えることは、デュラーレは「今」という瞬間を切り取っているのだが、速水御舟は「今の先」にあるものを見せようとしていることである。

言い換えれば「時を止めた作品と時を切り抜いた作品」の違いとなるだろうか。

なんとも不遜な書き口となることを許してほしい。わたしにとって大切なことは、自分で感じ切ることに他ならない。

画との対峙を通して作者——画家との対話が凡てだ。

同じことは、小説や詩にも云えるのである。

それは宗教や信仰の姿勢に通じ、神との対話に通じるのである。



参考 Link の原稿

■ 2023年2月27日 22:21

■ 絵画は楽しく美しい。すべての芸術家は芸術家という人間だったに過ぎない。

(注意) 本稿は、多分に書き手の主観が支配的原稿となつております。したがいまして、パクリなどは一切ありません。参考素材出典は文中前半に紹介。

もしもなにか、パクリが疑われる際は、お気軽にコメントにてお申し出くださいませ。

文責 飛鳥世一

この度、本稿が「現代アート記事まとめ」にフォローされました。

本当にありがとうございます。みなさんに楽しんで頂ければ幸甚に存じます

現代アート記事まとめ — noteアート — note

現代アートについて書かれた記事をまとめていく公式マガジンです！ 主にハッシュタグ「#現代アート」「#モダンアート」が付けられ

note.com

本稿を書く上で参考としている書籍等一覧

■ ロンドンナショナルギャラリー展図録集

■ カラヴァッジオ展図録集

■ 芸術新潮 2016年3月『カラヴァッジオをつかまえろ』

■ Leonardo da Vinci 芸術と生涯 田中英道

- Leonardo da Vinci の手記 杉浦明平
- カラヴァッジョへの旅 宮下規久朗
- そのとき西洋では 宮下規久朗
- 閣の美術史 宮下規久朗
- 他

さて、まずは貼り付けた画をどう覗いていただきましょう。



洗礼者ヨハネ.jpg

画像

レオナルド・ダ・ヴィンチ作 洗礼者ヨハネ

さて、ルネサンスの巨匠と云えば、Leonardo da Vinci の名前を誰でもが思いおこす処でしょう。貼り付けた画はダ・ヴィンチの手によるといわれる『洗礼者・ヨハネ』。ダ・ヴィンチの『遠近法』の極意はスマート技法にあると云われていますが、緻密緻密な絵具の入れ方は、X線解析ですら筆跡をみつけることが出来ないと云われています。要は、細かなドットを小さな筆でピッシリと何重にも重ね塗りをしながら、奥行きであり遠近、立体を表現したのです。

2023-02-27 (10).png



画像

カルロ・クリベツリ作 聖エミディウスを伴う受胎告知

次に紹介するのがカルロ・クリベツリの手による『聖エミディウスを伴う受胎告知』ですね。ロンドンナショナルギャラリーにかけられている、1486年の画ですが、同じくルネサンス期のメジャー一枚です。分かりやすい遠近法の描写テクニック**|**|**|**ただし、ここで注意してみる必要があるのが、最下段のピーナッツとリンゴでしょうか。なにか、落ちてしまいそうですね。画から突出してみえます。

デュラーホウサキ. png



画像

アルブレヒト・デュラー作 野ウサギ

次に紹介する画が、元祖黒胆汁氣質・北方ルネサンスの巨匠・アルブレヒト・デュラーの手による『野ウサギ』です。さて、この画を是非じっくりと眺めて欲しいのです。
この遠近感……空間・余白の使い方、いまにも動き出しそうな野ウサギの鬱遠近を感じさせる対象物は他にありません。余白だけです(笑)



2023-02-27 (9).png

画像

ミケランジェロ・メリージ・ダッ・カラヴァッジョ作 エマオの晩餐 さて、でました。われらが鬼才。今の時代に生きていたなら、とてもじやありませんが画なんか描いていられなかつたであろう狂氣と天才の狭間を筆で渡りし者。その名も光と闇の魔術師・ミケランジェロ・メリージ・ダッ・カラヴァッジョ。さて、カラヴァッジョは『バロック期』の画家ですね。ソノ奇行は、エゴン・シーレどころではなく(笑) まあ画を観て頂きましょう。カラヴァッジョの天才的才能を表現するとき、幾つかのファクトがあるのですが、今日は、その中から『突出効果』と『瞬間的効果』について書いておきましょう。ともに遠近法と奥行き、時間を綴じ込めるためのテクニックなのですが。エマオの晩餐では、一人の人間が手を眺めてに向けて突き出していますね。これだけで遠近と奥行きが支配されています。机の上に目を移しましょう。「おつと……あぶない」そう。落ちそうですね、今にも。あの果物たちが。ここでも突出効果と瞬間的効果の相乗効果が、時間と奥行きをドラマチックに仕上げています。



速水御舟 つばき.png

速水御舟《椿花妍彩》1926 (大正15)

画像

さて、いよいよ出てきました。世紀末生まれの日本画家。速水御舟です。ここで皆さん。これまで眺めてきた画の遠近法と、奥行き、時間の取り方を比べてみてもらいたいのです。この速水御舟の画と最も近い画を描いた画家は誰なのでしょう……と、書くと、誰かひとりと思っちゃうかもしません。

違うのです。

速水御舟の画は、空間の支配と、突出効果を狙った実に理論的な画なのです。パット見ただけでは、平面的に見えるはずです。たしかどこかにも書いていましたね。ところが、空間・余白を徹底的に支配下に置くことによって、画が、花が画面から飛び出すような突出効果を狙っていると見えてきます。椿の葉っぱの一枚一枚の間隔、折れ、曲がり、凡てが遠近を感じさせ、結果的に突出効果を感じる上で最も効果的な配置となっていることがわかるでしょう。二匹の蝶々は、生命の瞬間を切り取ったものとみることが出来そうです。

ロマネスク様式

ゴチック様式

ルネサンス様式

マニエリスム様式

バロック様式

ロココ様式

クラッシック……

ネオクラッシック

象徴派・印象派

1000年の美術史の中、遠近であり、立体、奥行き、瞬間そして「時間」を表現するようになってから700年たらず。

速水御舟が行き着いた境地は、それぞれの時代の「いいとこ取り」だったのかもしれませんね。

ダ・ヴィンチは、自分が生きた時代から1500年を遡って勉強したのです。すべての芸術家は皆そうなのです。

「今」だけを勉強したのではないのです。

では、わたし達がダ・ヴィンチや、カラヴァッジョを学ぼうとしたときいったい何年分を勉強しなければならないのでしょうか。

速水御舟を勉強しよう、シーレを勉強しようとを考えたとき、何年の勉強をしなければならないのでしょうか。

やつてられないし非現実的、それは専門家にお任せしましょう。

わたし達は自分の感性を打ち震わす「感動」の旅に出るぐらいが現実的かもしませんね。芸術家は、芸

術家という人間だったのです。

詩人が詩人という人間であるように。

了

いやいやいや、なんとも今読むと、粗いし薄っぺらいし、チョイトズレている所が恥ずかしくて仕方がないのだが、ここで修正すると何ともイジマシク、コズルイ感が半端ではなく漂うのである。

従つて、敢えて手は入れずこのままにしておくのだが、どうだろう、今書けばもう少し何とか出来るのだろうか(笑) moto の皆さんにこんなものを読ませてしまつたことは本当に申し訳ないのでござります。

速水御舟作『炎舞』を書く④

■ 2023年3月26日 05:34

■ 速水御舟作『炎舞』を書く ④

速水御舟作『炎舞』を書く ①からの抜粋
備忘録

※蛾からは写実的取り組み姿勢がうかがえるものの、炎からは印象的姿勢が勝つている感じられるのは気のせいなのか。どうも日本画、日本美術の変遷に見られる炎のスタイルを踏襲しているように見える。蛾の一瞬を切り取った姿と炎の姿には異質が滲んでいる様に見える。

分かりやすく書くならば、彫刻美術にみられる****」例えば、不動明王などの彫刻美術を飾る火炎に酷似するのである。

関東大震災

大正十二年

作画時期

大正十四年ごろ

I
M
G | 2 0 2 3
03
26
04
50
01
3 6 5 . j p g



3/24に届いた別冊太陽 速水御舟 2009/10/01 73ページ

『炎舞』(六二頁)は、黒い闇を背景に渦巻きながら上昇してゆく炎が、様式的な描き方をされている。この火炎表現は、伝統的な絵巻物や不動明王などの仏画、仏像の光背などの影響を受けていると従来から指摘されている。以下続く。

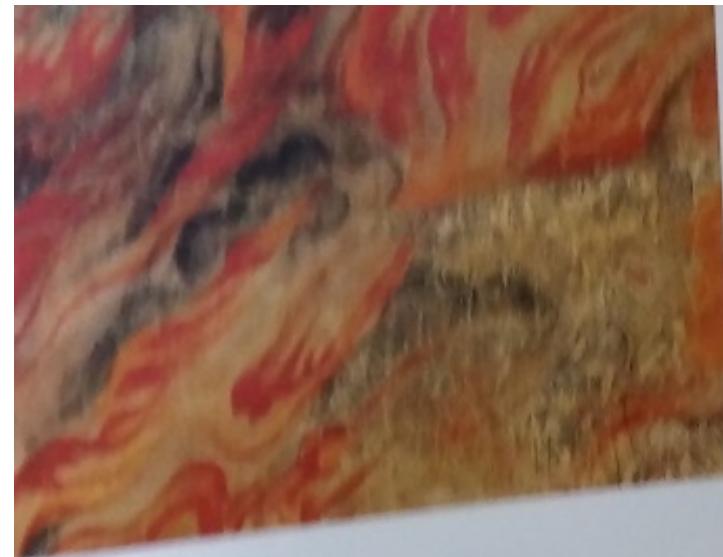
仏画、絵巻の炎描写との比較

榎淵豊子

Teyeko Kashiwa

〈炎舞〉(六二頁)は、黒い闇を背景に渦巻きながら上昇していく炎が、様式的な描き方をされている。この火炎表現は、伝統的な絵巻物や不動明王などの仏画、仏像の光背などの影響を受けていると従来から指摘されている。

さて、御舟が安雅堂画塾時代に粉本模写した可能性が高い「伴大納言絵巻」と〈炎舞〉の火炎表現を比較してみよう。絵巻上巻の応天門炎上を描いた部分は、炎と煙が、朱や丹墨によつて赤と黒の強いコントラストで描かれている。そして火炎は、S字カーブを描いて独特のフォルムを形成する。この「炎の形」を見比べてみればたしかに御舟は、古典の様式的な火炎表現を踏襲しているのは明らかである。しかし、周辺を黄口朱でぼかすことにより、炎の反射と光滅による揺らぎを表現することに成功し、バチバチとはじける火の



結局シロウトなのだ。

勉強していらないとこんなものだ。貼り付けさせていただいた抜粋・備忘録に書いたことだが、先日届いた「別冊太陽」に我が思いを裏付けるコラムをみつけることが出来た。「やはりそうであるか」という程度のことしかなく、仏像や仏画を眺めてきた人間であれば辿り着ける結論なのだが。

一つ云えることは感性に支配された我が洞察の目は、ダテではなかつたようでありホッと胸撫で下ろしなんとか画を観る目は保てたようではある。

三冊ほど資料を入手し、連日首つ引きに勉強させてもらつてゐるが、やはり史料価値としては別冊太陽が一番高い。

もしも速水御舟を勉強するのであれば「別冊太陽 日本書を破壊する 速水御舟」をお勧めする。

事実は事実として紡ぐべき処は紡ぎ、拾うべき処は丁寧に拾うべし。歴史時代を滲ませるのであれば、それは書き手による最低限見せるべき姿勢だろう少なくともわたしはずつとそう考えている。

それにしてもだ、一人の根っこに辿り着くと横が広がつてゆく。有難いようであり、迷惑なようであり、止めるところが問題となるのである。

加筆

一人の根っこに辿り着くと横が広がつてゆく――。

根っこになど辿りつけようもないのだよ。根っこなど、本人にしかわからないことなのだ。強いて言うなら「わかつたつもり」となるのだろう。

そのわかつたつもりを何処で切り上げ、結びとしようとするのかが今を生きる人たちに与えられた特権でもある。何事でもそうだ。

まあ、一事が万事「根っこ」を探る旅などしていた日には些か気が狂う。

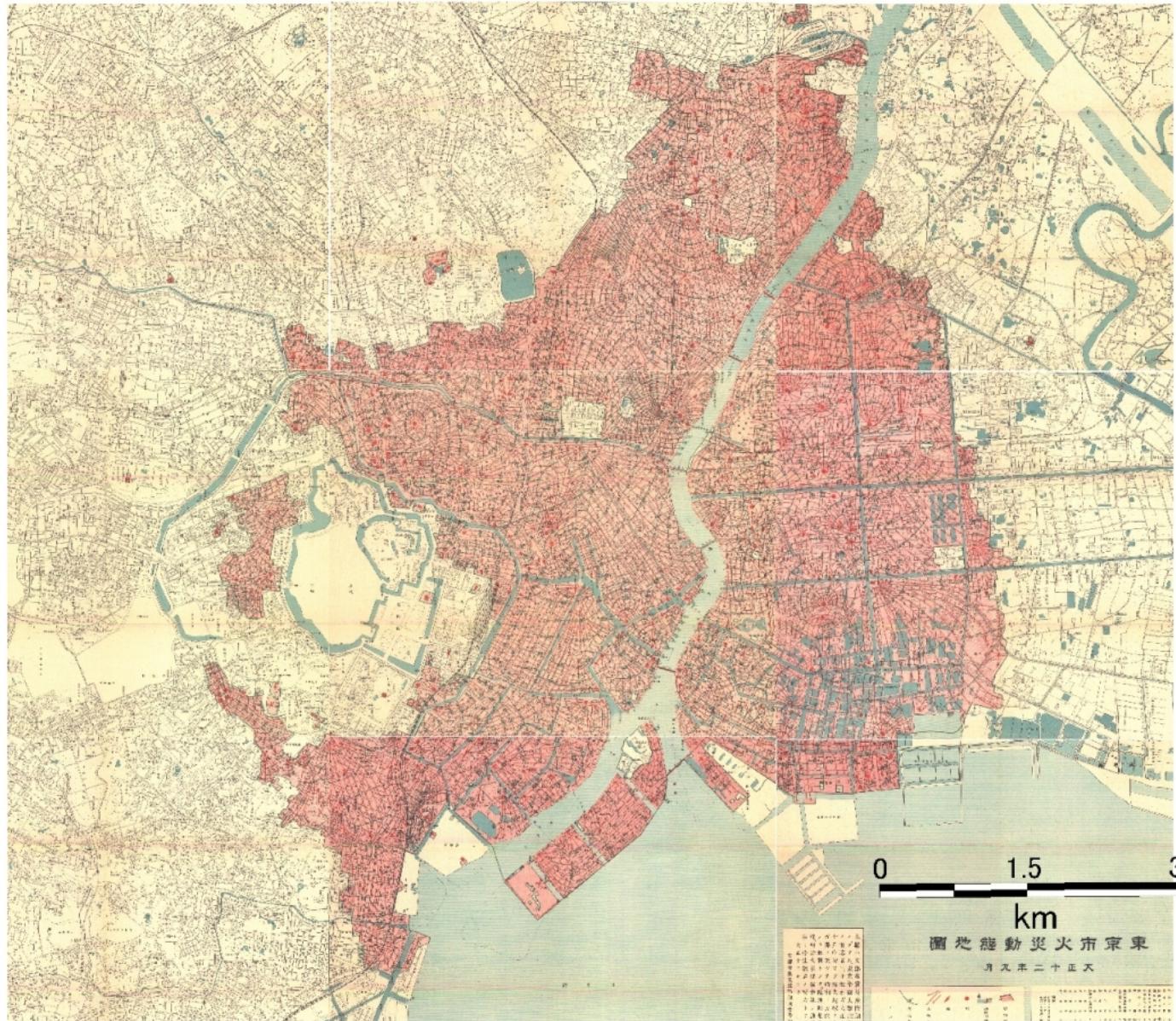
自分にとつて必要なこと譲れないことだけにフォーカスし根っこを探つてみなければなるまい。あとのことはケセラセラ～お好きにしなはれ～である。

まあ、概ね自分の考え方と「別冊太陽」での解説については近似性の確認はできた。裏付けだ。

この画に出会つた当初より、御舟の制作年をみて感じていたことだが、大正十二年の関東大震災の時、速水御舟は「川崎」に在住していた。

以下にこの時の火災被災図を添付しておくの眺めてみてほしい。

20001.jpg



ご覧いただいてもお分かりのように火の手は現在の大田区まで延びており、隣は川崎市である。速水御舟は川崎の町から真っ赤に染まる東京の空、燃え盛る地獄の劫火を目の当たりにしたであろうことは想像に容易い。

関東大震災 大正十二年九月一日十一時五十八分のことだった。死者・行方不明者は十万五千人以上とも言われ、当時の東京市の六十パーセント以上が罹災延焼したと言われている。火の手に追われ逃げ惑う人々は、差乍ら闇夜の焰に逃げ惑う「蛾」に相似して映つたとしても不思議はない。

大正十四年

御舟は軽井沢の地で「炎舞」を仕上げている。

庭先で焚火の焰に集まって来ては縦横無尽に逃げ惑う蛾の姿をながめ、震災時の人々の有様に触れ画にしてみたのではないか。



速水御舟 炎舞
png

わたしはそう感じている。

が解せないことが一つある。

御舟は「炎舞」という銘をうつてている。ここから何を感じよというのだろう。不動明王の後炎を想わせる「どうか」は劫火なのか業火なのか。

多分……劫火が近いのだろう。わたしはそう感じている。

人の手が及ばざる自然界の摂理。焼け焦げることを知つてか知らずか炎に集る数々の蛾は人間の無力さを顕したものなのかもしれない。

※ここでは炎と焰という字を使つてゐるが疑問を持たないでほしい。どうしても同じ漢字が使えるわけがないと考へた結果である。

了

速水御舟作『炎舞』を書く⑤

■2023年3月27日 22:14

■速水御舟作『炎舞』を書く ⑤

絵画の世界において、いわゆるオールドマスターと呼ばれる画家たち（18世紀以前の著名な画家）の作品に「タイトル」が付けられるようになつたのは18世紀になってからだと云われてゐる。それまでは、画家自らがタイトルをつけることは無かつたようだが――。一応これが通説だ。

絵画が一般庶民の暮らしに身近になるにしたがいオーケションが活況を見せはじめると、作品を説明する上でもタイトルがあつた方が分かりやすいだろうという思いが働いたものか、タイトル付けが一般化したようだ。それまでの宗教画から風俗画へのシフトが進んだ時代だ。

そんなことを考へてみると――

またぞろヤヤコシイものが首を擡げてくるのであつた……

『御舟よあなたは何故この作品に『炎舞』というタイトルをつけたのか。なぜ、一見陳腐とも思えるタイトルを冠したのか。『鍋島の皿に柘榴（大正10年）』とする必要があつたことに寄り添うと感じられそうだが、破壊と創造、破壊と再構築を『炎舞』からどの様に立証してみよというのか。それとも違うファクトが・・・見落としているファクトが存在するのだろうか』―― どの道わたしは〈関東大震災・大正十二年秋〉があなたに齎した影に凝着をみせるのである』世一

まだまだ、お勉強は続くのでありました。

世一

加筆

二年半前に書いた原稿だが、結局は関東大震災がわたしの心の中に深い楔を打ち込んでいる。

あのね、これまた独善との誇りを受けること覚悟の上で書かせて頂くのだが、所謂、美術芸術の専門家であり、美術史の専門家の先生達はこういうことは書けないのである。エヴィデンスが必要なのだ。言うなれば、書き手は泉下の人となつてゐるわけだからして、本人に聞くことは出来ない。従つて、画に鑑られる事実を積み上げることが是となる。

別にこれを否定するつもりは無い。寧ろ正しい方向性だと思う。

が、小説家であり詩人は違う。自由なのだ。いや、自由でなければならないだろう。

書き手の心のざわめきに寄り添い、これを表現できるのは寧ろ詩人や小説家、音楽家などに集約されるだろう。洞察、想像、研ぎ澄まされた感性。

結局のところおよそ不確かな人間の構成要素に頼らなければ一方の芸術は存在し得ないのである。そしてそれは読み手の感性と繋がり、好き嫌いに通じて行くのだろう。

「わたしもそう思う」などとは考えてもらわなくとも宜しいのだ。

心さえ、感情さえ動かすことが出来ればそれで良いのである。

ましてわたしの書くものは、速水御舟という人間を書くのではない。速水御舟の書いた「炎舞」という作品を紡ぎとして使つた小説である。「あゝ、この小説書きは炎舞をこう扱つているのだな。こりや感動的だわ」そう感じてもらえればコツチノモノである。

了

速水御舟作「炎舞」と吾小説「燐冥」

2025年11月13日 11:16

速水御舟作「炎舞」と吾小説「燐冥」

情けないが、来年だべな。。。速水御舟作「炎舞」と吾小説「燐冥」
ギブアップだ。

一画に合わせて小説を書くのか。小説に合わせて画を選択するのか。小説ありきか画ありきか。これは中々
に難解な闇ぎなのだ。

印象、象徴、写実、そして幻想。すべてがぶち込まれた速水御舟の代表作でもある「炎舞」という名のつ
いた作品。東京は広尾の山種美術館収藏の作品である。ご存知の方もおられるよう、三島由紀夫がそ
の作品「金閣寺」の装丁画として使用している。どちらにせよもう一度鑑に行つておかなくば仕上がら
んめえ。



速水御舟 炎舞
png

大正14年 速水御舟作 「炎舞」 東京広尾の山種美術館収蔵

炎の様子は印象とも象徴ともよめる。蛾の舞う姿も写実ではない。蛾は全体で眺めるべきであり、幾何学図形への凝着姿勢が覗え

その舞姿からは幻想がにじむ。

この画において「写実的」取り組みが覗えるのは「熱風と煙」だ。あまりにも見事な熱風と煙と鑑えないだろうか。

まあ、身の程知らずも甚だしくも拙著小説「燐冥」ではこの画を全体の紡ぎとして使用、作品の表現を試みようとしているわけだが、なんとも難しいのだ。未だに書き手という人間に寄り添うことが出来ないでいる。

カオスと書けば誤解を受けるのかもしれない。しかし「混沌」と書けばどうなのだろう。

何故、速水御舟は「全部盛り」にしたのだろう。云うてみたところでこれはわたしの感じ方であるから、プロの美術史家であり美術評論家の先生達がどう鑑ておられるかは定かではない。あくまでわたしの感性がこの作品から受ける印象。そのところを氣をつけて読んでおいてほしい。幾分、様式美に振れているが、あくまでパーソナル。インディビデュアルな感性が立った成れの果てだ。

ただお判りいただけるよう、炎を見れば「写実」ではないことが理解できるだろう。寧ろ印象技法が支配的だ。炎に舞う蛾たちは幻想の世界へと誘う試みが感じられる。そして——立ち昇る煙と熱風からは「写実性」が顕著に覗われる所以である。ここがこの画のキモでもあるだろう。本来的には炎であり、蛾でありを写実で表現しても良かつたはずなのだが、御舟はそれをしていない。寧ろ最も難しい煙と熱風を写実の扱いとしているように見受けられる。

何がこの作品をこのように書き上げさせたのだろう。それによって御舟は何を表現したかったのだろう。

その旅が終わらぬ限り吾作品も書き上ることが無いだろう。

ただ最近に至つて朧気ながら見えてきたことがある。普通、画家の画く作品からは時間への凝着姿勢が少なからず覗えるのだが、どうしたことかこの作品からは時間への凝着姿勢が覗えない所以である。厳密に言えば、流れる時間の一瞬を切り取ろうとするのが絵画の有り様でもあるのだが、この作品に関しては寧ろ「時が止まっている一瞬」を抜き出した様に感じられるのだ。蛾という命を生きる素材が書き込まれているにもかかわらずである。何が御舟の時を止めたのか。

思い込み、即ち独善にも似るところなのだろうが、ある意味、一発勝負。書き手は泉下の人となり久しい。「こうなのだろうなあ」というところで落ち着けなくば正着はよめまい。

本当は、どれかの文学賞に送り出したい作品だったが。書けぬのであるからしてどうもしようもない。来年出せるように書き上げてみたい。
小説家になるためには一日12時間以上原稿用紙に向かわねばならぬそうである。ふむ。無理だべな(笑)
『精々が小説みたいなものも書いているらしい家』というところだろう。

了

画家速水御舟のみた地獄

画家速水御舟のみた地獄

「我々は、我々が観るところのものに執着するのではなく、それを超えた思索に赴かねばならない。」
ヴァーレルブルクコレクション・シンボリックイメージ前書きより。

違和感を感じられる正常な神経の持ち主が大半なのか。それはそうだ、第三者が本人に確認したわけでもないのに断定的に「みた」としているのだ。寧ろ違和感を持たない方がスットコドッコイというものである。まあ、今の時代、真偽の確認もせず幻説に振り回され断定的判断をする人間など珍しいことはないのだが。今こそ審美眼について考えるべきか。おっと脱線。

しかし、ここで「みたかもしれない」と書くのであれば、小説書きなどはやめてしまった方が良いだろう。

万が一これに類するケッタ糞の悪い小説などに出会った日には、申し訳ないが火をつけキッチンで燃やしてしまうこと請け合いである。

いや、それはもう小説とはよべまい。

一人の人間の根っこに近づきこれを洞察洞観のもと小説作品と出来ないのであれば小説書きなどつとま

ただ、一人の根っこに辿り着くと横が広がつてゆくのである。

おいそれと根っこになど辿りつけようもないのだよ。根っこの中身など、本人にしかわからないことなのだ。強いて言うなら「わかったつもり」となることしかできないのだろう。

そのわかつたつもりを何処で切り上げ、結びとしようとするのかが今を生きる者達、そして小説書きに与えられた特権でもある。

何事でもそうだ。

まあ、一事が万事に「根っこ」を探る旅などしていた日には些か気が狂う。

自分にとつて必要なこと譲れないことだけにフォーカスし根っこを探つてみなければなるまい。あとのことはケセラセラ～お好きにしなはれ～である。

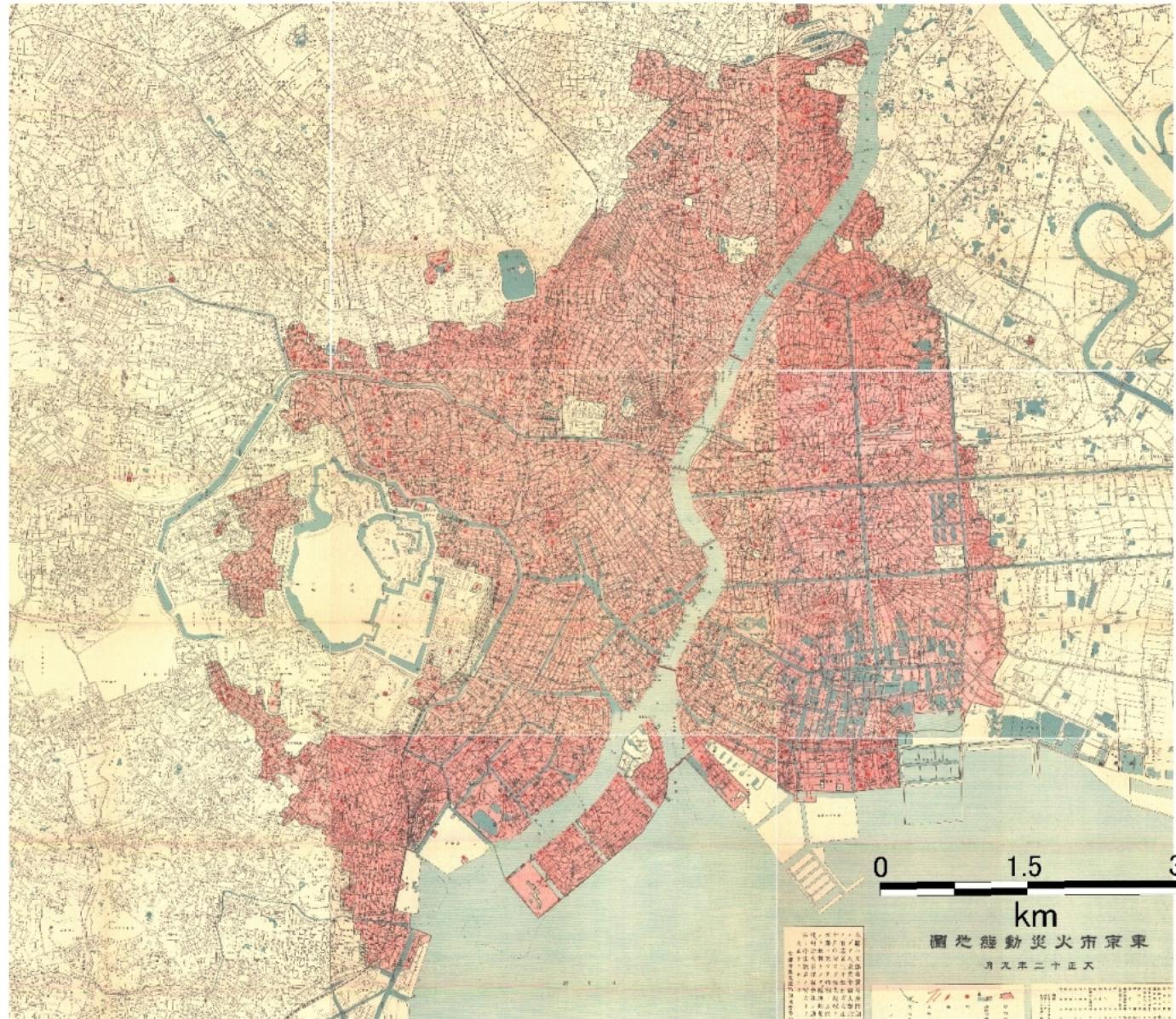
まあ、概ね自分の考え方と「別冊太陽」での解説については近似性の確認はできた。裏付けだ。ただ、関東大震災と炎舞の紐づけはどの様な形にしろ覗うことは出来ていない。まあ、研究者もエヴィデンスを見つけられないのだろう。この辺り、学者先生は不便でもある。

それに引き換え、小説書きはある意味見てきたようなことを書けるという自由裁量も有するのだが、これが「根っこ」を大切にするポイントでもある。

この画に出合った当初より、御舟の「炎舞」の制作年をみて感じていたことだが、大正十二年の関東大震災の時、速水御舟は「川崎」に在住していた。

以下に関東大震災の火災被災図を添付しておくの眺めてみてほしい。

関東大震災罹災延焼広域図



ご覧いただいてもお分かりのように火の手は現在の大田区まで延びており、隣は川崎市である。速水御舟は川崎の町から真っ赤に染まる東京の空、燃え盛る地獄の劫火を目の当たりにしたのである。

関東大震災 大正12年9月1日11時58分のことだった。

死者・行方不明者は10万5千人以上とも言われ、当時の東京市の60パーセント以上が罹災延焼したと言われている。

火の手に追われ逃げ惑う人々は、差乍ら闇夜の焰に逃げ惑う「蛾」に相似して映ったとしても不思議はない。

大正14年

御舟は軽井沢の地で「炎舞」を仕上げている。

軽井沢の庭先、焚火の焰に集まって来ては縦横無尽に逃げ惑う蛾の姿をながめ、震災時の人々の有様に触れ画にしてみたのではないか。

わたしはそう感じている。

が解せないことが一つある。

御舟は「炎舞」という銘をうつてはいる。ここから何を感じよというのだろう。不動明王の後炎を想わせる「どうか」は劫火なのか業火なのか。

多分……劫火が近いのだろう。わたしはそう感じている。

人の手が及ばざる自然界の摂理。焼け焦げることを知つてか知らずか炎に集る数々の蛾は、人間の無力さを顕したものなのかもしれない。そうながむると、炎舞の印象的な劫火の様子についても合点がゆくだろう。

了

随想好日『世一語録・絵画と文藝』

随想好日『世一語録・絵画と文藝』

凝着（と）めた時空（とき）をもう一度流す——
さて、これは絵画での表現としては容易ではあるまい

詩と小説なら腕さえあれば出来るのである
問題は「腕」なのだ。

※これは分かる人が分かれば良い話しだが
ストーリーを動かすということではない
切り出した「シーン」に命を吹き込むということなのだが
文豪と呼ばれる先人たちの作品はみんなこれに長けている
だから文豪であり、藝術家なのだろうが――。

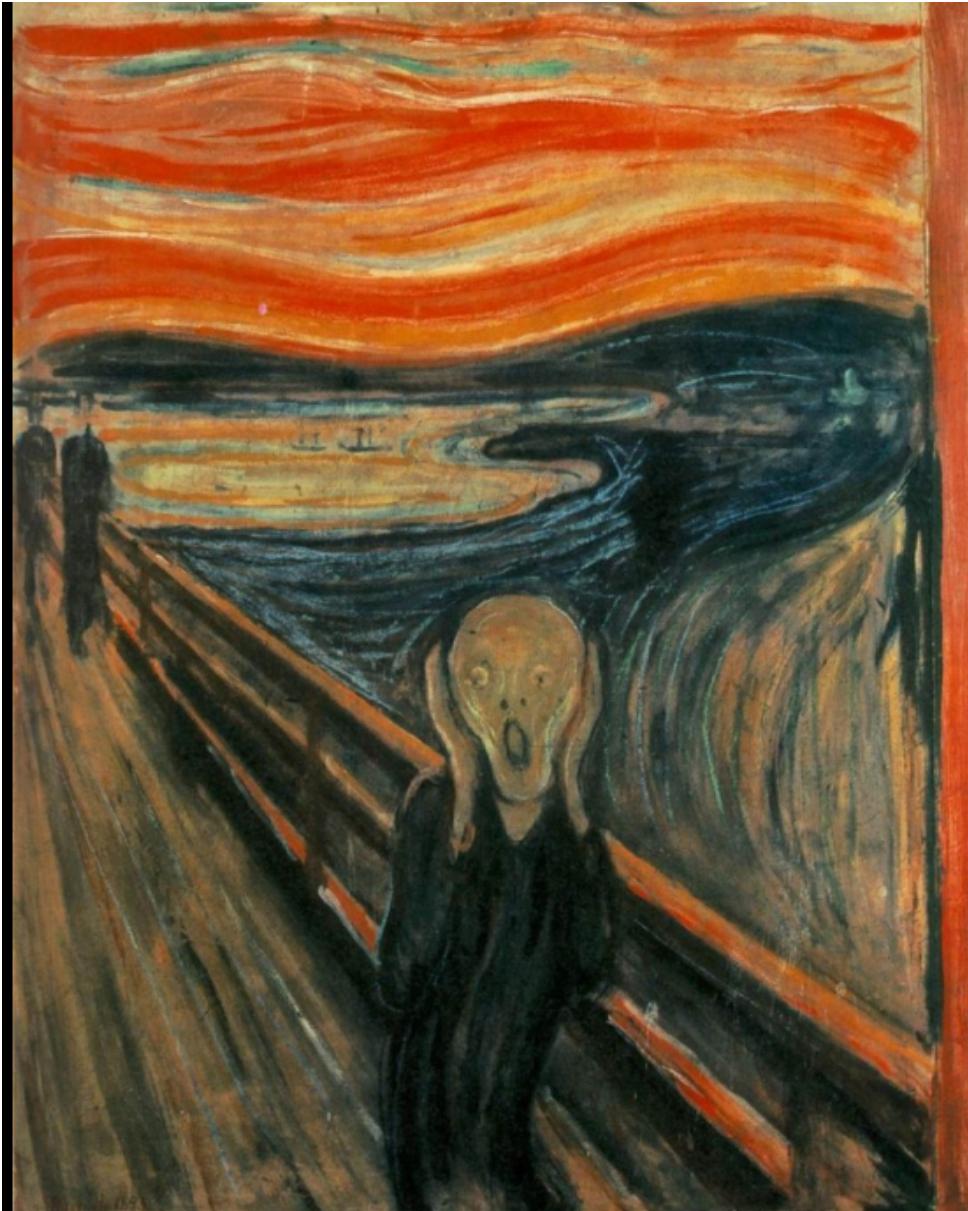
「我々は、我々が観るところのものに執着するのではなくそれを超えた思索に赴かねばならない。」
ヴァールブルクコレクション・シンボリックイメージ前書きより

スクリーンショット 2025-11-23 23:01:20.png

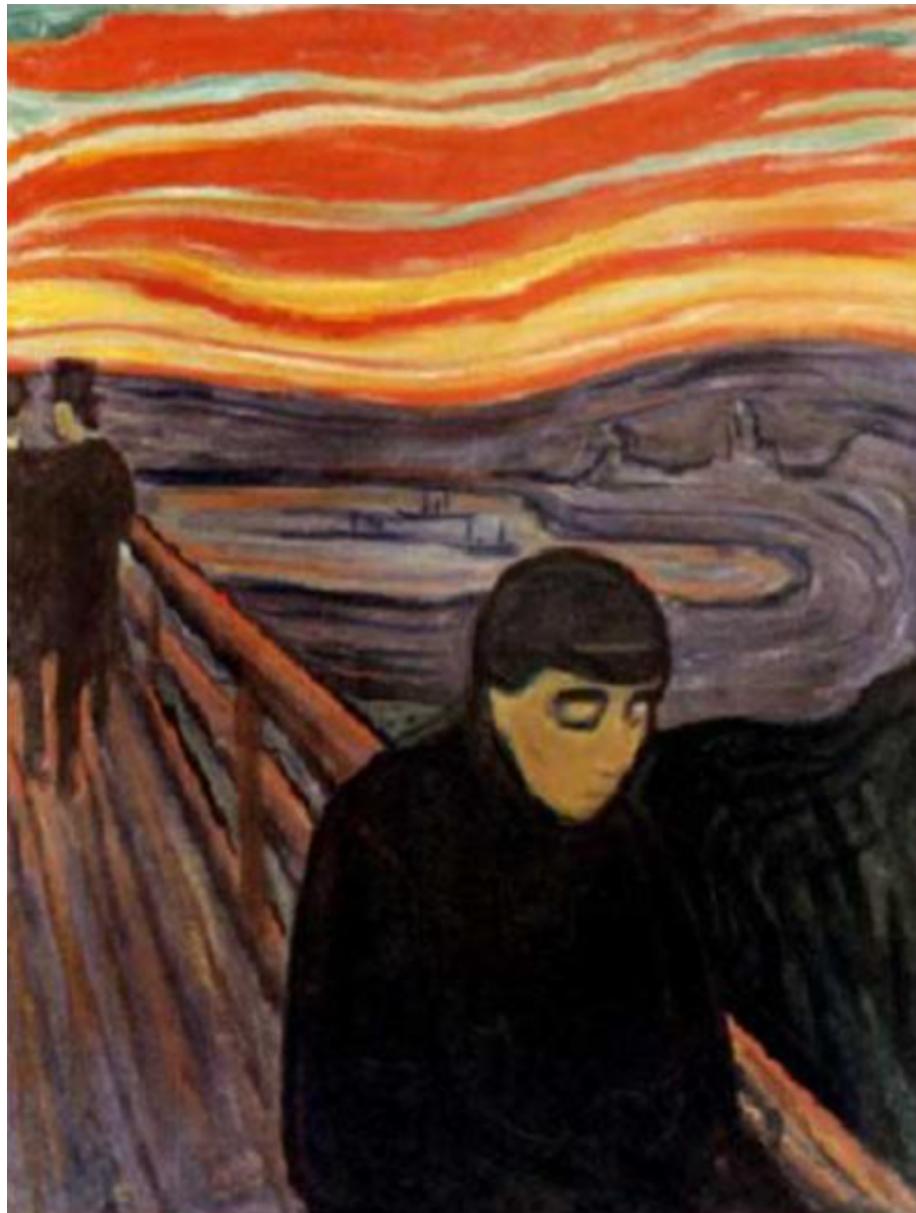


ムンク 3連作 生命のフリーズ 「不安」

スクリーンショット 2025-11-23 23:02:11.png



ムンク 3連作 生命のフリーズ 「叫び」



スクリーンショット 2025-11-23 23:03:35. png

ムンク 3連作 生命のフリーズ 「絶望」

画家にとってシーンを動かす一つの手業は連作に顯れるのだろう。

ムンクの手による連作などもこの一つの表現手法ではある。

ただ、ムンクのこの連作においては、寧ろストーリーを動かした結果として映る。

一方でイタリアの鬼才、ミケランジェロ・メリージ・ダッ・カラヴァッジオも幾つかの連作に手をつけている。中でもわたしにとっては彼の作品こそ、奇才・・ならしめた作品であり、愛すべき作品の一つだ。何故なれば、同一シーンを連作によって動かしているからなのだが。以下の作品は「ホロフェルネスの首を斬るユディト」という作品であるが、本作は、連作として「3枚」画かれたと言われている。しかし、今のところ2枚しかみつかっていない。それが白ユディトと黒いユディト――。

さて、未だみつかっていない最後の一枚は「何ユディト」なのだろう。

これはわたし가既に小説作品として書いており、手を入れて完成させるだけになつていて。何人たりとも触るべからずである♪



ホロフェルネスの首を斬るユディト白.png

ミケランジェロ・メリージ・ダツ・カラヴァッジヨ作
ホロフェルネスの首を斬るユディト・白バージョン



ホロフェルネスの首を斬るユディト黒.png

ミケランジェロ・メリージ・ダツ・カラヴァッジヨ作と言われている
ホロフェルネスの首を斬るユディト・黒バージョン

さて、前にも書いたことだが、カラヴァッジヨ。

もう一枚のユディトは何色にしたのだろう。

そして興味深いのは「連作順」だろう。

それが一番でどれが二番で、どれが三番なのか。

これほどシーンに命が吹き込まれた絵画を……

わたしは他に知らない。

何故なら……連作順によつて物語はいかようにでも変わり
どの様な人間でも創り出すことが可能なのだから。

このシーンを言葉で動かすことが出来れば
なんとかなりそうな気はするが。

それが出来ていないからいつまで経つても小説が仕上がらない。

言葉ですら動かしがたい人間を画で動かす鬼才カラヴァッジヨ畏るべし。

了

空は空 一切は空なり／速水御舟・カラヴァッジヨ編最終話

空は空 一切は空なり／速水御舟・カラヴァッジヨ編最終話

例えば病氣と言われてもわたしは画に狂う一

さて、一応「空は空一切は空なり」としたシリーズもこれを最後とする予定だが、狂つてゐるからして
マタゾロなにかを書きはじめないと限らない。まあ、画家にしろ小説家にしろ芸術家と呼ばれる皆さ
んはどうちらかなど狂人の部類に入らなければ卓越した作品は生み出せないのであるからして、これ

狂人と呼ばれるることは一つの名誉と考えなければならないのだろう。

さて、ここまでトチ狂った結果の実績を書いておきましょう。

昔の原稿で書いたことと重複する部分もありますからお気を付けください。
それからね、あまりどんでもないことを書くとカラヴァッジョの第一人者、わたしの尊敬する、宮下規久朗先生にまたまた怒られちゃうのでほどほどにしておきたいと思います。わたしと同い年だったかな。もうね、本当に優しい先生なのよ。ちゃんとご褒美もくれたしさ。こんなシロウトに。わざわざ自分の本の中で。今考えるとその配慮に泣けてくるのだわ。

ホロフェルネスの首を斬るユディト黒 - コピー（2）.png



さて、召使、女中のお婆さんの首元をみて何が感じられるだろうか。まるで子供の顔か人の顔のようなものが貼り付いている様に見えるだろう。これは「Sin（罪）」の穢れの寓意であり、ユディトに悪魔に魂を売り渡し、本懐を遂げることを唆す悪魔の使い走りのような存在なのでしょう。次第にユディトの口元には牙めいた影も顯れ、衣服も黒衣へと変貌を遂げてしまつたのでした。正義がエゴへと変わる瞬間ですね。

何度も書いているのですが、さて、三枚のこの作品が並べられた時。この黒衣バージョンが何番目にあるのでしょうか。そして、まだ見ぬ三枚目のユディトの衣装は何色なのでしょうか。カラヴァッジオはユディトを何色に塗り上げたのでしょうか。

わたしは何色だと思うか~いや、それは書きませんよお~(笑)



ホロフェルネスの首を斬るユディト白・コピー（2）.png

さて、お次は速水御舟作「炎舞」ですが……
どうやら御舟、やってますね。これは御舟、完全にやってます
まずはご覧いただきましょう。
先ずは、引いた全景画像、そして部分的拡大画像です。



速水御舟 炎舞
png

炎の切れ目に薄ぼんやりと浮かぶ丸い顔を想わせる存在。もしもこれが地蔵菩薩をイメージしての「炎舞」というタイトルならわたしには合点がゆくのである。



速水御舟炎舞 - コピー .png

どうだろうか。耳、目、鼻、口、そして坊主頭の輪郭。それは差乍ら地蔵菩薩の有り様そのものとして私の眼に映るのである。むしろ引いたところからみた方が分かりやすいだろう。以前、山種美術館で見たときにはもつとはつきりと人の顔のように見えていたのだが、写真だと光の加減の問題もあり、幾分くすんで見える感じがする。

前から書いている様に、関東大震災の東京を襲った未曾有の大火災に着想を得た作品であることは私の中では確かなものとなっている。

だとするなら……御舟が、この画の中に地蔵菩薩を書き顕したとするのなら

被災死者10万5千名の御靈を供養する想いが書き込まれたとして不思議はあるまい。

御舟にとって、自然の摂理に翻弄され、手を拱こまねいでいるうちに命を落とした人間たち、宗教と信仰、そして仏の世界と摂理を顕す上で、伝統的であり印象的……炎の描写は、「これしかなかつた」と寄り添うに大いに合理性を感じるのである。

最後にひとつ書いておくと「そう見える者達」がそう見れば良いのだ。信仰とは人間にとってそういうものである。

「イワシの頭も信心から」との言葉が、どこの国の言葉であつたか思い出してみるべし。

世界で最も早くレオナルド・ダ・ヴィンチ サルバトールムンディーを「俺流」から解析したのは誰であろう、わたしである。詳しくは以下の Link 「異端の系譜は紡がれるのか？」を暇つぶしにどうぞ。





サルバトールムンディ202109222.jpg

さて、誤解を受けること恐れずに書かせてもらうと、キリスト教文化に立脚したところからでは私のようには「救世主」を切り貼りするメンタルはある意味持ちえない。逆説的にはそういうメンタルが持つるのは、オポでありリアリストと云えなくもないものである。キリスト教徒の方たちにとつて救世主は救世主であつてそれ以外の何ものでもないことは当然のことなのだ。それが信仰だろう。

しかし、わたしのようによく人間としてのダ・ヴィンチを眺めてきた者にとっては彼の作品すべてにある種の「騙しと疑い」の眼をもつて対峙することとなる。ヴァールブルク学派による「我々は、我々が観るところのものに執着するのではなく、それを超えた思索に赴かねばならない」とは正にそういうことであり囁み碎くところ「騙されてはいけない」ということと理解しているのである。

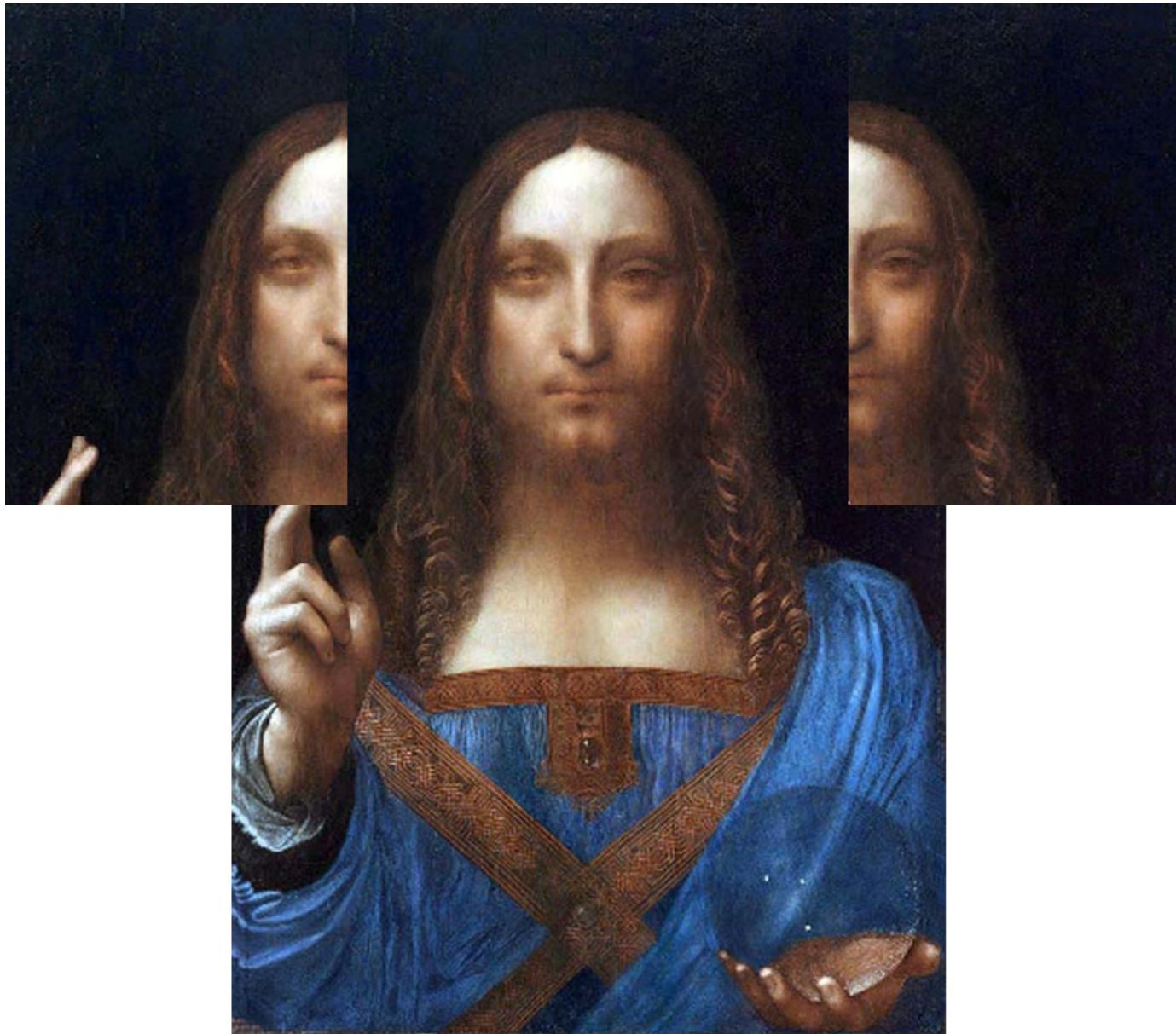
救世主・サルヴァトールムンディというタイトルをつけたのはダ・ヴィンチではない。ではこの作品をダ・ヴィンチの手によるとして鑑たとき

一体この画を通じてどのような「祝福」を頗したかったのだろう。

これに想像を及ぼせるためには、可能な限りの人間の根っこに近づく必要があるだろう。どう見るか、信仰の対象とするべきなのか、人物画とするべきなのか、ダ・ヴィンチのゴスペルと考えるべきなのか。絵画の楽しみ方は人それぞれであることが基本なのだが。

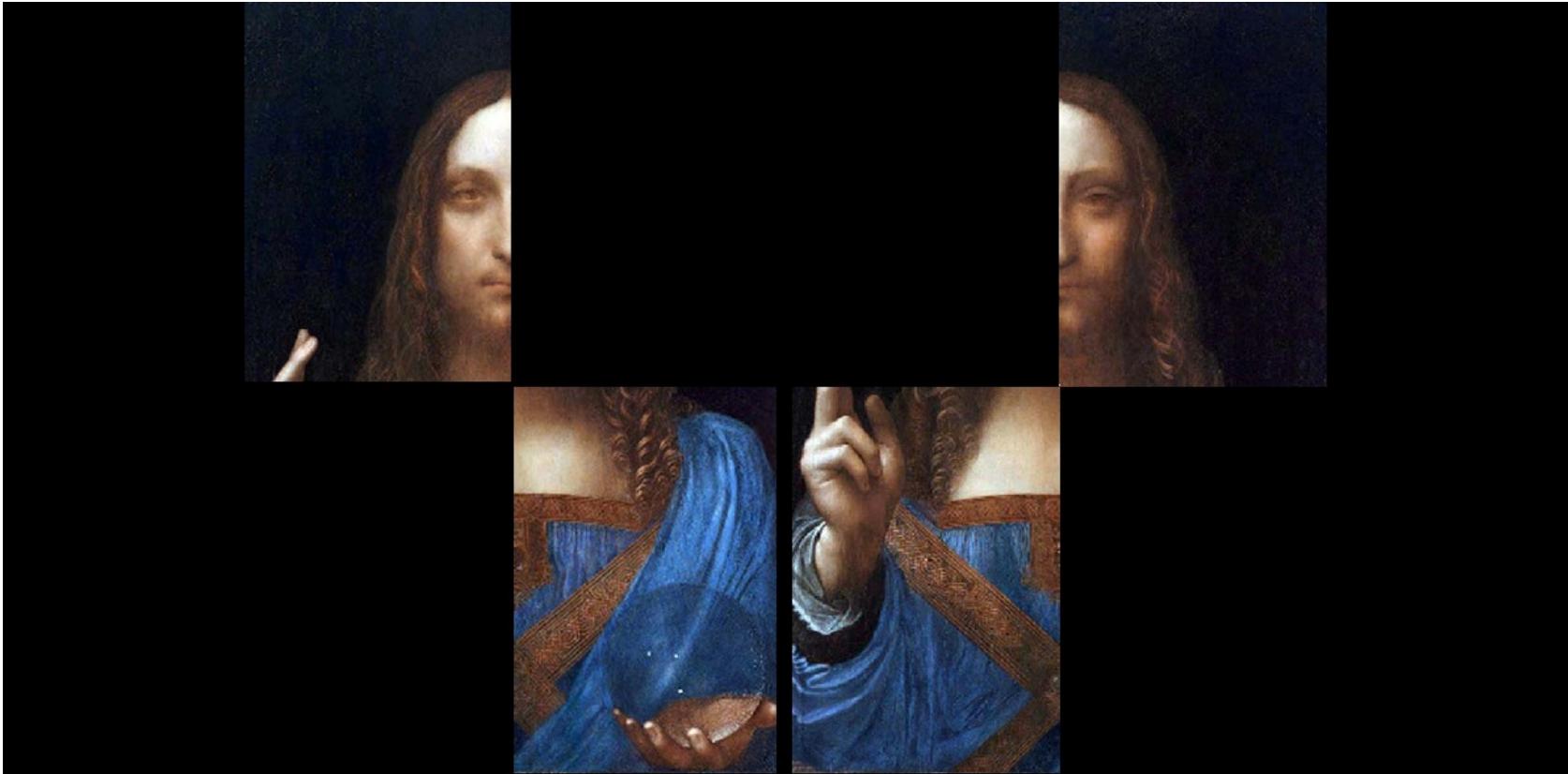
最後に一つ申し上げるとすれば、誰の作品であるかについて「素人」が口にするのはやめておいた方が良い。無益である。これがダ・ヴィンチの手、またはダ・ヴィンチのシンジケートの手によるものかはプロの判断に委ねるべきなのだ。寧ろ「何を画いた」のかに考え及ぼせた方が……豊かになれるのではないかね？ 心も感性も教養もそして人間も。だって勉強するでしょ？

サルバトールムンディ解析画像 - コピー.jpg



この左右非対称はそもそもダ・ヴィンチの人体比例理論からの逸脱をみせて いる。
もしもこの画をダ・ヴィンチが無意識に画いたとするなら……
レオナルドダヴィンチは、画がヘタであるwww

サルバトールムンディ 27.jpg



もう、言葉はいるまい。テーゼすべきは「あんた誰?」ではないだろうか。

さて、わたしどもの本家本宅アメブロのタイトルを「存じだらうか」「異端の Tourism Doctrine」というのだが(笑)

絵画が教えてくれた『際(きわ)』

絵画が教えてくれた『際(きわ)』

2013年に本宅アメブロで書いた原稿へのアクセスが手厚い。解析してみると、どうやらXエックスからお運びであることが見て取れた。どう感じられても良いのだが……、何かモノを感じたり、言われたりするのであれば、せめて、先日の原稿に貼ったLinkとPDFの研究ノート稿ぐらいは読んでおいてくれよ。

人間てものは10年もあれば学びもするし、宗旨も変わる。あんたたちの子供だって、十年ありや成人だらう。

あの辺の原稿で足が止まる人間というのは、概ね成長できていないというのが図星が梅干しW だって、あの後にもこうして書いているのだから。

オモシロそうな、都合の良いとこだけ切り取るなよ。アホに見えるから。

さて、熱がある許してたもれ。思い込みも機能している。狂ってるから。

ヴァールブルク学派による

「我々は、我々が観るところのものに執着するのではなく、それを超えた思索に赴かねばならない」

一つだけだ。「絵画」という物語が本当に読めるようになりたけりや。
想像と創造を止めるな。話をつくつてみよ。幾つもだ。

一丁目一番地まで、ありとあらゆる可能性を探れ。

そのうち「際」が身に付くようになる。

ましてだ、学芸員にでもなろうというのなら話は違うが、ド素人が日常の暮らしの中にチョットした豊か

さであり、文化、教養を身に付けようというのなら、あまり様式美に執着するな。それはプロの仕事だ。
感性を磨く上で話しを創れるかどうかは大事なのだよ。

どの道、一丁目一番地までの可能性を探ってゆくと……「俺だったら、この画でどんな物語を感じて欲しいと思うだろう」という所に行き着く。しまいにやコ芝居まで打ち始める。

ここで「際」が初めて機能する。捨て際と拾い際だ。

小説でも書きすぎると鼻につくだろう。

「書き過ぎじゃね～」って。その際ギリギリ攻めるのがプロなんだべ。

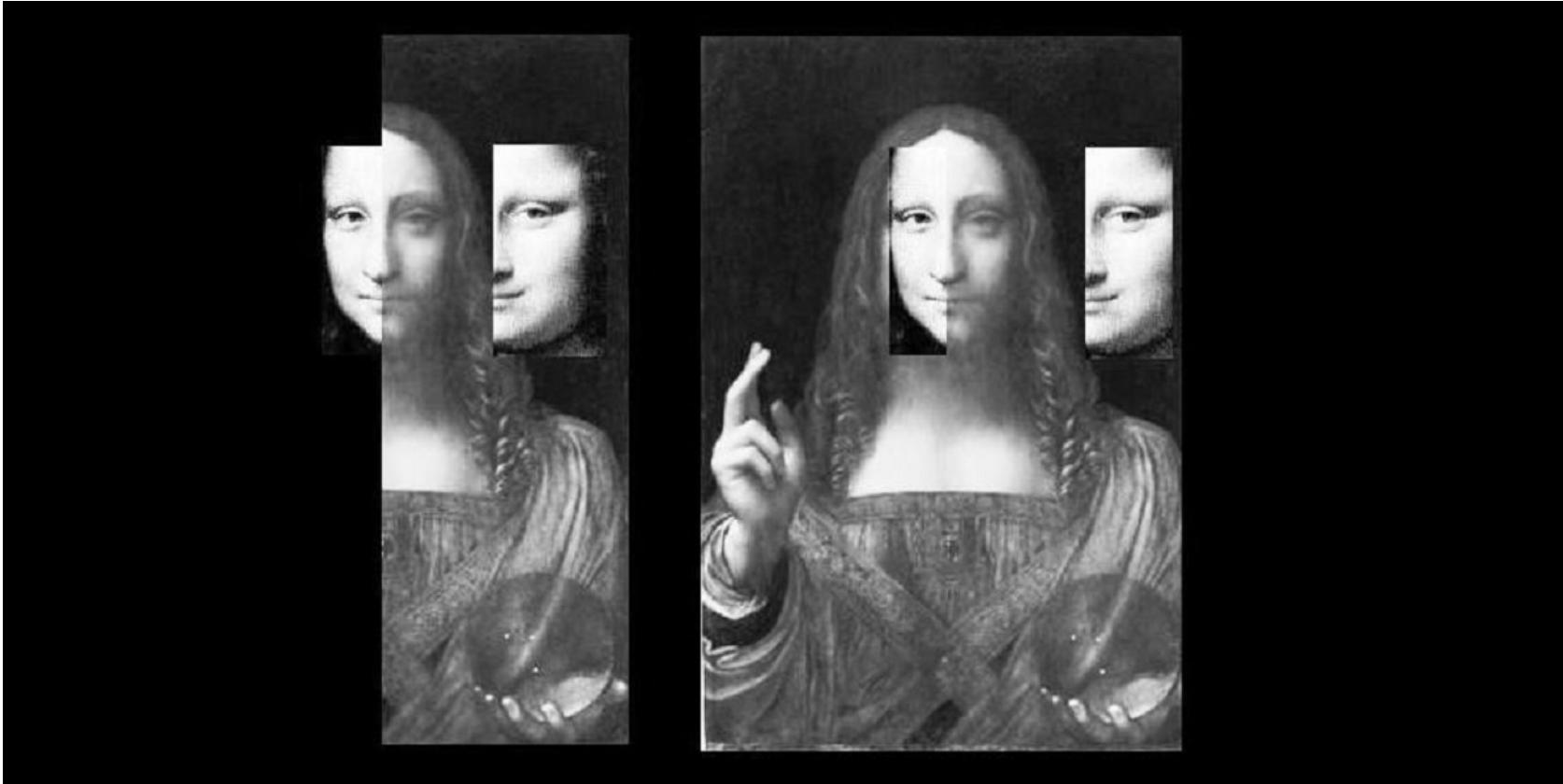
文章読む人間で、結局最後はそこの際読むんだと思うけどね。

まあ、俺は画も小説も隨筆もそう読むけどね。

つらつらと俺は考え発熱のお誕生日の晴天によお

了

モナリザとの同一性 2013.12.09 - コピー.jpg



ダ・ヴィンチはやつちやつてる=

サルバトールムンディとラ・ジョコンダは姉妹作だ

したがつて、ダ・ヴィンチの真筆の「一つの」可能性ともし得るのかもね
不毛だけど。

▽世一語録▽

そもそもだ、小説は一人で読むんだろ?

なんで絵画を一人でみねえんだよ。

なんでてめえの感性を誰かと意見交換する必要あんだよ。

感性つてなあ教えを乞うもんじやねえの。自分で磨いて輝かせるの。

アホなんだよ。

んなもなあ結局喧嘩にしかなんねえだろW

芸術という感性が立った人間なら、芸術でつるむべからず。

ツルんだ瞬間「おまえはもう○んでいる」

速水御舟作「炎舞」令和7年・俺流解析総集編

速水御舟作「炎舞」令和7年・俺流解析総集編

はじめに

ここまで、速水御舟に関連した原稿を何本挙げたのかさえ記憶の彼方へと翔んでいる。

概ね、三年近くになるだろうか。はじめて速水御舟の「炎舞」という作品に出会ったとき、わたしは「この画を書かなければならない。いつか、必ず書かなければならない」そう思った。それは、レオナルド・ダ・ヴィンチ作と伝わっているところの「サルバトール・ムンディー」に初めて出会った今から14年前に感じた衝動と同質のものだった。

「書かなければならない」これは、わたしにとつては使命感にも似た背中を押されているような感覚……それとも前髪を掴まれ得体の知れない何かに引っ張られている様な感覚とでも云えるかもしれない。結局、両作品とも未だに書けてはいない。書けていない理由は明白なのだ。両作品そして、もう一作。田中

一村***。この二作品は、わたしにとつて仕上げた瞬間「絶筆」にあたいる作品たちなのだ。覚悟がいる作品たちなのだ。

今般、速水御舟作「炎舞」についての俺流解析総集編を上げるに至つたことは、この画を小説とする道筋がついたことと落としどころが付けられたことを意味する。「サルバトール・ムンディー」は既に勝負はつけてある。あとは書くだけだ。

が、田中一村は「臚（おぼろ）」なのだ。人間が書いてはいけない小説のような気もしている。それだけに、誰かが書かなければ***書くことによつて救われる人間たちがいる気がしている。わたしの中、この気持ちの始末をつけないことには、田中一村には向き合えないだろう。

ここでは速水御舟作「炎舞」令和七年俺流解析総集編。ゆっくりお楽しみいただきたくご案内申し上げます。



速水御舟 炎舞
png

さて、上の画像は速水御舟の手による「炎舞」という作品である。大正14年。速水御舟が軽井沢の地で書きあげた一作として多くのファンに愛されてきた。東京、広尾は山種美術館収蔵の作品として知られた速水御舟の代表作でもある。一方でこの作品は、文壇の天才。三島由紀夫の手による「金閣寺」の装丁画として使われていることでも知られている。金閣寺について触ると悪戯に長くなるので先を進めることとする。ただ、一つだけ。三島は無類の美術愛好家としても知られている。

三島と美術の関りについては、とんぼの本新潮社「三島由紀夫の愛した美術」宮下規久朗氏、井上隆史氏による対談形式の本を参考としてほしい。のっけからの緊張感あるやり取りは、宮下先生も、この頃は尖がりまくっていたことが読み取れて、思わず口元が緩み筆舌に尽くしがたい。

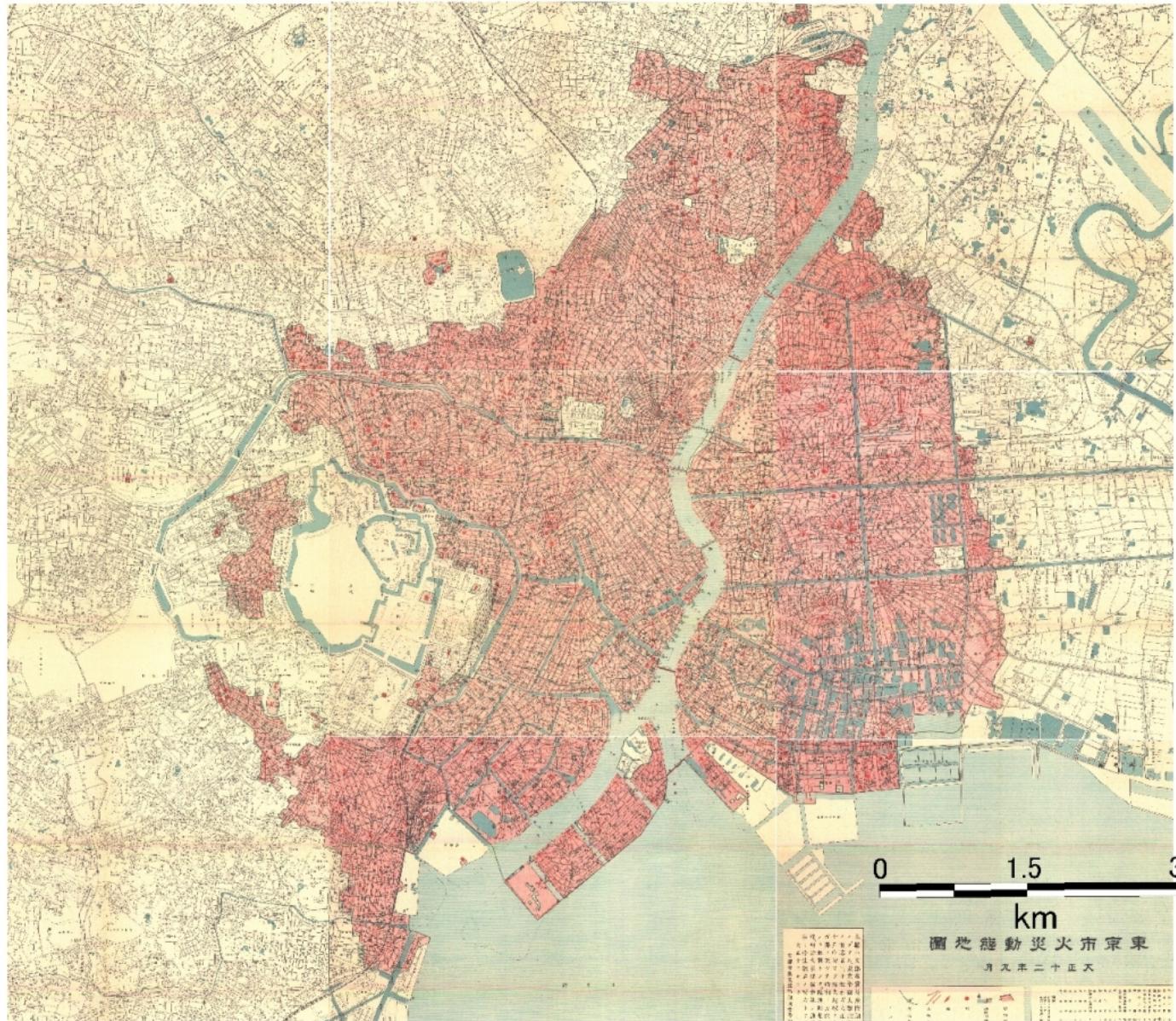
先ず、わたしが最も着目注目したのが「炎」だった。そして「炎舞」というタイトルだった。炎舞というタイトルが「優しすぎた」ためだ。もしもこの画で「厳しさ」であり、「地獄」を表現しようとするのであれば炎舞というタイトルはつけていないだろう。ここがわたしの一丁目一番地となつた。そして「炎」という字から来る印象は、「焰」と「焱」という旧字体が機能していた時代にもかかわらず、選択が優しいのである。わたしは、ここから覗える、御舟の「優しさ」を立脚地としてみるとした。

炎の画、表現からは難しさを感じることは無かつた。様々な解説書でも書かれている通り、不動明王さま、焰魔(閻魔)大王さまを想起させる仏教上の印象技法として落ち着けることに何らの違和感は感じなかつた。ただし……ここで見逃してほしくないのが、わたしが焰魔という旧字体を用いている処だ。不動明王さまをあらわす「ほのお」であれば炎がシックリくる。これは感覚の問題だ。

しかし、閻魔大王を頭すのであれば「焰(ほのお)」が落ち着く。これはものを書く人間のある種、詩的な感性だ。なぜならば、旧字体では焰魔大王とも書くのだから。この時点においては、果たしてあの印象的な「炎」が、不動明王を頭してのものなのか、閻魔大王を頭してのものなのか。一切、釈然とすることは無かつた。

が、転機は徹底的な「際攻め」が齎してくれた。実物をこの目で見たときに感じた印象。そしてネットの画像で感じ得る印象。ここから捨うべき際と捨てるべき際を洗い出し、わたしの感性に忠実にサルベージを試みた。

200001.jpg



関東大震災罹災延焼広域図

当初からわたしが感じていたことは、炎、炎舞、印象、蛾、大正14年、川崎、軽井沢、出来事、関東大震災、死者10万名、8割以上が火災による死亡が答えを導くファクトとして存在していた。

「きっと御舟は川崎の棲み家から、焼け焦げる東京の空を地獄として視たに違いない」と。直ぐ目の先で家は焼け落ち、着の身着のままの人たちが燃え広がる焰に晒されながら逃げ惑う様子を地獄絵図として観たのだろう。中には逃げ遅れた年寄りを助けようと火炎の中に飛び込んだ人間もいたのかもしれない。さながら炎に舞う蛾のように。

ここでわたしは行き詰っていた。

しかし、カラヴァッジョの「ホロフェルネスの首を斬るユディト」の二枚の作品を前にした時。一つの気付きが落ちてきた。

さて、一体どれほどの人たちが彼の作品を前にした時に「宗教画」として感じることが出来るのだろうと感じた。どうにも、色っぽいオネエチャンがオッサンの首を斬る。はて、痴情の縛(もつ)れか、そういう感じることを止めようのないモティーフ。

しかしてその実態は、宗教画なのである。旧約聖書・外典「ユディト記」の一コマ。宗教画である。



ホロフェルネスの首を斬るユディト白.png

この視点をわたしは炎舞に投影することを忘れていた。関東大震災で亡くなった人たちに手向けた弔いと
いう視点の「宗教画」としてみるとことは飛躍し過ぎなのか。いや、違う。あの印象技法で顕された「炎」
は仏教的思想が具現化したものである。だとするなら、この画を信仰の対象として眺めることも可能
なはずである。そしてわたしはみつけるに至った。

凡ては繋がった。

「地獄の劫火」を思わせる印象技法の焰は「焰魔大王」を寓意としており、画の中さながら「シユミラク
ラ」とも思える人物的風貌を感じさせる塗上げ。「焰魔大王」は地蔵菩薩の化身であるそうだ。わざわざ
地蔵菩薩の功徳をここで書く必要はあるまい。具体的に「どこが」というのも控えよう。見える者が感
じる者がそのように感じれば良いのだ。

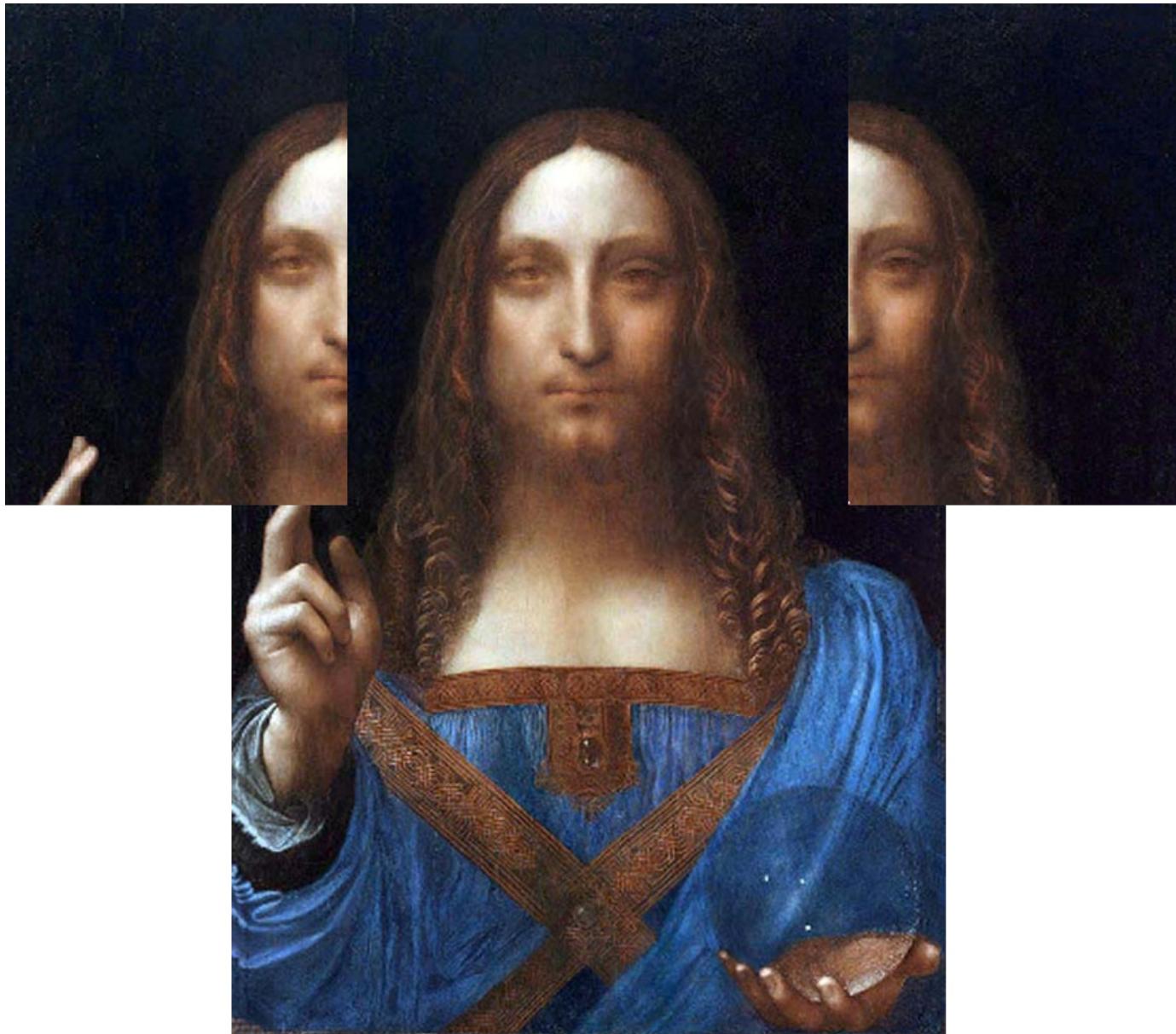
それが信仰の有り様でもある。

この速水御舟の画、「炎舞」は、御舟が間近で見た地獄絵図と化した東京の空のもと命を落としていった
者たちへの手向け、そして地蔵菩薩の功徳を顯した冥途へのはなむけの画なのである。
身を焦がすほど焰の傍を舞う蛾の説明はいるまい。

さて、この炎舞の中に見える地蔵菩薩さまだが……わたしの観方であるからして他人様に強制するもの
ではない。そう見たい者はそう見ればいい。見たくないものは見なければ良い。

しかしだ……

サルバトールムンディ解析画像 - コピー.jpg



ダ・ヴィンチ サルバトール・ムンディ

画家という名の藝術家という生き物は、何処まで人騒がせであり、何処まで詩人なのだろう。エゴンシーレが言っていた。「すべての藝術家は詩人でなければならぬ」と

2023-09.png



尚、本稿はここ板主、筆名飛鳥世一の感性に頼ったものであります。残念ながら速水御舟も泉下の人となつて久しく、今となつてはエヴィデンスもとれず。結果、精々自分で落ち着けたように始末をみるべきかと存じます。

まあ、「際(きわ)」だね。有り得る際。有り得ない際ではなく。

最後までのお付き合い、心より御礼申し上げます。

了

あとがき

さて、仕上がった。

ソコソコのボリュームとすることが出来た。
ど素人である。

したがつて、自分の気になる画。気になる作品だけにフォーカスして仕上げた一つの研究ノート。
ただ思うことがある。

「残念な男よ」と(笑)

自画自賛と受け取られかねないが、わたしは感性オバケなのだ(笑)

特に美術芸術方面に関する感性の尖がり具合は「狂氣」の沙汰と自分でも感じていて。調べることつき詰めること同化を試みること何の苦労もなく、何時間でもやつていられる。まあ、わたしの場合は「人間」に寄り添う所に時間をかけるのだが。

生憎、貧相なボキャブラリーを駆使しての原稿であるからして、幼稚に映ることもあるだろう。どうか笑いながら読んでいただければ有難い。

ただ、絵画を通じてものを書くと決めたのであれば、対象となつた画ぐらいは妥協することなく徹頭徹尾調べ上げて書くぐらいの気概は持ちたいものである。

どの道、持つていないものは逆立ちしても書けぬのである。
それが全てだ。

後付けして持つてみようが、生まれてこの方ずっと持つていようが、どの道持つていらないものは書けないものである。創作であり芸術に魂を梳ることを試みるものにとつては持つているものが全てとなる。さて、速水御舟のこの「炎舞」という作品を前にして、私は今の「持ち物」で書き上げることが出来るのだろうか。わたしの書き上げたい世界を書き上げることが出来るのだろうか。怒り、嫉妬、笑い、幸せ、恐れ、凡ての感動のどれか一つでも呼び起こす作品を仕上げることが出来るのだろうか。

まあ、慌てることは無い。しっかりと地に足付けて書き上げてみたい。

こうして纏めて仕上げてみて、新たに幾つかのことが分かった。

こんな自分の都合でまとめた作品に足跡を残してくれたりダウンロードをして頂ける貴方様お一人お一人に改めて感謝御礼申し上げます。

了

付録・聖書と絵画ラ・トゥール『聖ペテロの悔悟』一考察

付録・聖書と絵画ラ・トゥール『聖ペテロの悔悟』一考察

「我々は、我々が観るところのものに執着するのではなく、それを超えた思索に赴かねばならない。」
ヴァールブルクコレクション・シンボリックイメージ前書きより

書くまでも無いことだが、わたしは絵画・美術においては素人であるが故、様式美を言語化するつもりはない。いや、してみたくとも出来ない。プロはそれが出来るのだ。シロウトによる美の向き合いは何処まで行つても『インディビデュアル』を目的としたものとしなければならない。悔しくも悲しくもそういうものである。ただしこれを小説であり詩という創作による言語化に至れた際は創作者のゴスペルと成り得、「芸術家」としての美は既存・新規の区別なく世に問う力を作品に宿すことになるだろう。

聖書と絵画ラ・トゥール『聖ペテロの悔悟』一考察
「鶴は鳴いたのか、鳴く前なのか」

様々なヒントから作者の凝着姿勢・箇所を推測する

スクリーンショット 2025-11-07 09:39:00.png



ジョルジュ・ド・ラ・トゥール後期の代表的作品 1645年

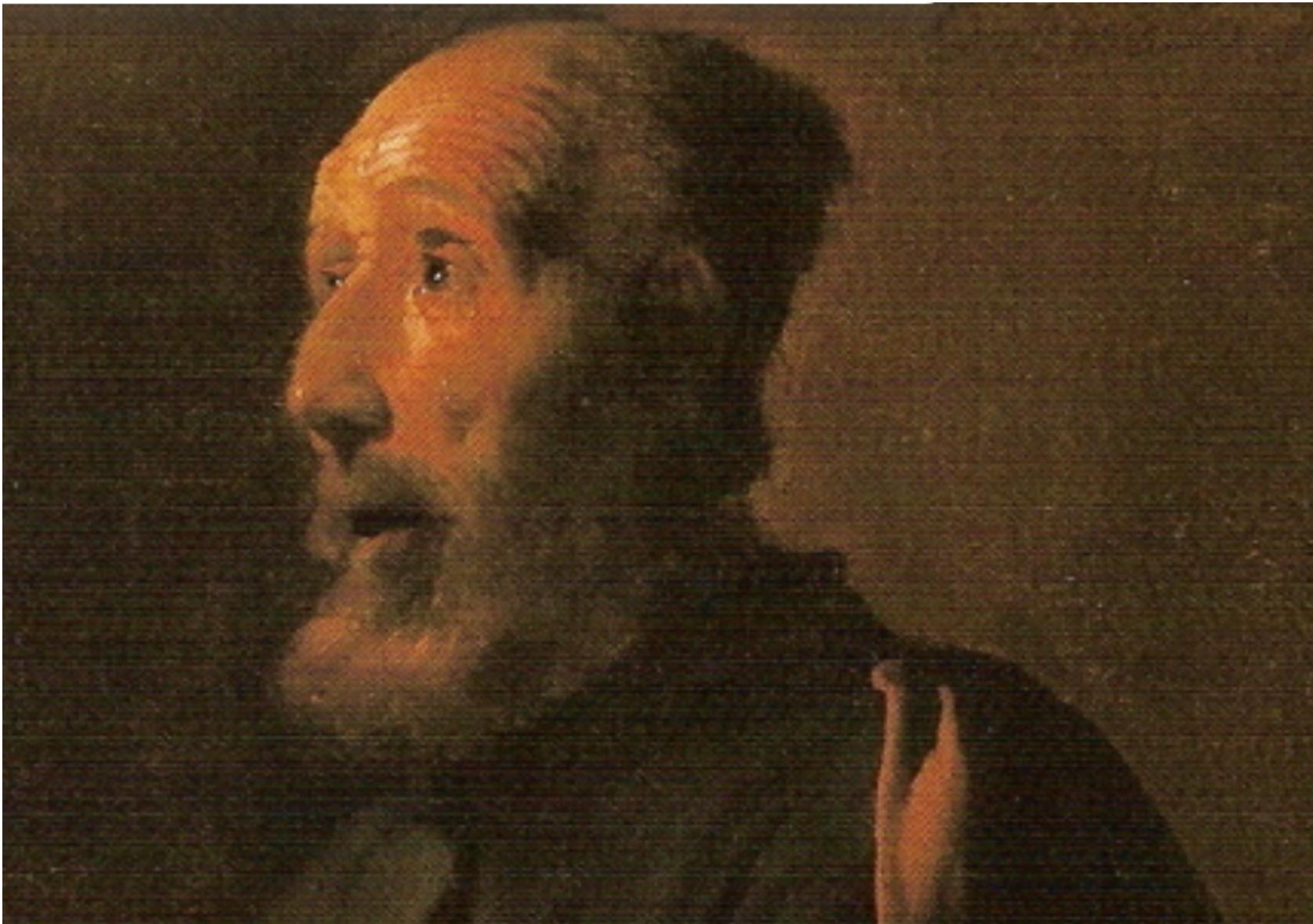
『聖ペテロの悔悟』またの名を「聖ペテロの涙」

たじたじとなつたペテロは、「そんな男のことなど、絶対に知らない。これがうそなら、どんな罰が下つてもかまわない」と言ひだしました。すねとすぐに、鶏の鳴く声が聞こえました。でその瞬間、ペテロは、はつとわれに返りました。「鶏が鳴く前に、あなたは二度わたしを知らない」と言つやしそう」と言われたイエスのことばを思い出したからです。ペテロは外へ駆け出して行くと、胸も張り裂けんばかりに激しく泣きました。

脚注・参考文献

<https://www.bible.com/ja/bible/83/MAT.26.JCB>

スクリーンショット 2025-11-07 09:39:44.png



なんという顔を見せて いるの だろ うか。人間の 何に 触れれば こんな顔が 画けるの だろ う。
そし て こんな顔を 小説の名で 表現す ると すれ ばど の様に 書き付 けるこ とが 出来るの だろ う。



スクリーンショット 2025-11-07 09:42:11.png

君だよ君。鳴いたのだろう。チョット前にさ。2度ほどさ。
ココッココケー、コケーとさ。

因みに、西暦30年4月7日のエルサレムの「日の出」時間は、午前6時01分ということのようだが、あまりにも古すぎるため、正確な情報は出てこない。現在に置き換えた算出した数字と理解してほしい。よって、鶏が鳴く時間は夜明けの2時間ほど前と云われていることから、4時前後と推察でき、この時間はまだ暗く空が白みかけるギリギリのところである。それを裏付けるように、画では左上から斜めに薄つすらと白みかけた明かりが入り始めている。

同時に、聖書によつては訳中において、鶏の鳴く時間を「夜」としており、ペテロの後悔と改心を信仰の「夜明け」としていることに気が付けるだろう。

この辺は聖書・福音書と
「アトリビュート」の整合性から導くとオモシロイ
以下A-Iの回答から

ペテロの涙—聖書の言葉の余韻に浸る

聖書における「ペテロと鶏」は、イエスがゲッセマネの園で捕らえられた後、ペテロがイエスを三度否認する場面を指します。イエスは事前に「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言つだらう」と予言されており、ペテロの裏切りがその通りになつたことを示しています。この出来事は、ペテロが自身の過ちを思い出し、激しく泣いたという有名な逸話です。

◆聖書にみる詳細と時系列

イエスの予言

最後の晚餐の後、イエスは弟子のペテロに対し、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言つだらう」と予言しました。ペテロはこれを強く否定しましたが、イエスはペテロの弱さを知つていました。

ペテロの否認

ゲッセマネの園でイエスが捕らえられた後、ペテロはイエスに付き従いますが、次第にイエスが誰であるかを問われます。彼は周囲の人々に囲まれ、三度イエスを知らないと否定します。

鶏の鳴き声とペテロの反応

ペテロが三度目にイエスを否認した直後、鶏が鳴きます。その瞬間、ペテロはイエスの予言を思い出し、イエスが自身を見ていたことに気づき、その場を離れて激しく泣きました。

象徴的な意味：この出来事は、ペテロが人間的な弱さや罪深さを自覚し、後に回心へと至る重要なきっかけとなりました。また、イエスの言葉が成就したこと示し、鶏の鳴き声はペテロにとって自己の失敗と悔い改めを思い出させる「サイン」となりました。

少々分かりにくいかもしれませんが、ラ・トゥールのこの作品では、ペテロは既に涙をながしているのです。ということは……アトリビュートとしての鶏は既に2度鳴いた後であることに気付いて頂けるでしょう。

即ち、この画のペテロは、立上り外に向けて駆けだす寸前の一コマを描いたものと眺めるに合理性が見いだせます。

ラ・トゥールによって時間の経過を Drastic に切り取った結果の一作と観ることも出来そうであり、鑑賞者としては聖書・福音書と宗教画の楽しみ方がわかりやすく表現された一作と云えるかも知れませんね。

まあ、これは偶々わたしが知っていた話であり、画であり、聖書・福音書の一部ということに過ぎないのですが。画一枚から「物語り」を感じる。その為には様々なファクトを知つておいても邪魔にはならないでしょ。特に宗教画の場合は、アトリビュート、シンボルが多く登場しますから、聖書や福音書は手放せませんね。

一つ書かせて頂ければ、これが私もある。

わたしは学者でもなければ美術史家でもない。しかし自分の触手が動く物には徹底的に時間をかけて調べ尽くして答えを求める。まあ、大抵のことは「どうでも良いから好きにしなはれ」となるのだが。通常の場合、通常のお人にとっては絵画の解釈などがそれにあたるのだろうが、わたしの場合は違う。こと芸術に関することは自分が納得するまで落とし込まなければ気持ちが悪い。

これもアウトサイダーティストとしての一面を有した結果なのか、血の為せる業なのか。まあどちらでも何の影響もないのか。

お人によつては「鶏が鳴くか鳴かぬかそんなに大事か？」と感じることだろう。大事なのだ。大事に大切に扱わなければ芸術であり美術・絵画を見誤ることに通じ、わたしの考える「作者との同化」は成立しなく、それは差乍ら今の小説読みの如しに墮ちる（笑）のである。すまぬ。

了

速水御舟 作 炎舞を書く

著 者 飛鳥世一(辻話人〔フル〕)

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
